
ちょっとした災難

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ちよつとした災難

【コード】

N9197B

【作者名】

【あらすじ】

どこにでもあるようなごく普通の高校ライフを描こうとしていました。

第1話：登校

四月は入学式の季節。

日差しもつららかな春のある日、二人の学生が道を歩いていた。

「今日からいよいよ高校生か。しかし今ひとつ実感が湧かないな」

一人は身長140cmくらい、幼さの残る顔に丸い眼鏡をかけていた。

「それはまだ高校に着いていないからですよ、兄さん」

もう一人は身長180cm以上で、人のよさそうな笑顔を浮かべていた。

この二人は双子の兄弟である。とてもそうは見えないが、名前は兄が晶、弟は秋彦という。

「おまえのいう事は時々わからん」

小学生にしか見えない兄がつぶやく。

「はい？ 何ですか兄さん」

高校の一年生には見えない弟が聞き返す。

「いや、まだ着かないのかと思ってな」

「もうすぐですよ、その角を曲がれば校門です」

そう言っただけで秋彦が指を指した角、そのあたりから朝の喧騒が聞こえてくる。

「そうか、いよいよだな」

「高校生活の始まりですね」

二人が角を曲がると、そこにはパトカー数台と大勢の警官、その周りを野次馬が取り囲み校門の前に集まっていた。

生徒達の朝のざわめきを期待していた二人は、顔を見合わせた。

「何だこれは。道を間違えたか？」

「いえ、道は間違っていないです。ここが私たちの高校です」

「何で警察が……機動隊までいるぞ」

「今日から警察学校になったんでしょっか」

「そんなバカな話が……」

二人が途方にくれていると、後ろの方から大きな声が聞こえてきた。振り返ると、ワイドショーのレポーターと思しき人物がカメラの前でがなりたてている。

「昨日、銀行を襲った強盗団がここ、私立今泉学園に逃げ込んだ模様です！ 強盗団は拳銃や爆弾で武装して現在も立て籠もっている模様です！ スタジオどうぞ！」

晶は肩をすくめた。

「これが俺たちの高校生活の始まりか？」

「派手ですね」

レポーターがまた大声を張り上げる。

「新しい情報が入ってきました！ 校舎内にいた生徒の一人が強盗団の人質になっている模様です！」

「強盗団は校舎内に爆弾を仕掛けたといっているようです！ それと人質解放の条件として、逃走用の飛行機を要求しています！」

レポーターの大声を聞きながら、二人は校舎を見上げてみる。

「入学式はどうなるんだろうな」

「明日に延期じゃないですか」

校舎を見上げていた晶が呟いた。

「せつかくだから、どんな学校が見て回るか」

「しかし中には入れそうも無いですよ」

「それならそれで周りをぐるっとまわってみようかと思ってな
なるほど、いいかもしれませんね」

二人は騒々しい校門前を離れて、学校の壁沿いに歩き出した。

校門前よりもましとは言え、マスコミ関係や野次馬はあちらこちらにいて落ち着かない。

春のうららかな日差しの下、二人は壁に沿ってのんびりと歩く。

「とりあえずなんだな、綺麗な学校だな」

「出来たばかりの校舎ですから」

「中に入るのが楽しみだな」

「今は強盗が入っていますね」

さらに5分ほど歩くと、マスコミも野次馬もいないところに出た。

「ふーん、この辺には誰もいないんだな」

「結構広い学校ですからね」

晶の眼鏡がきらりと光る。

「せっかくだから忍び込んでみるか？」

「というと、あちらの方のようにですか？」

そういう秋彦の指差す先を見ると、誰かが壁をよじ登っていた。

「そうそう、あんな感じで……って誰だ」

「さあ？ 私達と同じ制服を着ていますからこの学校の生徒だと思
いますか」

二人が見つめる中、よじ登っていた誰かは壁の向こうに消えてい
った。

「どうします？ 兄さん」

「負けられんな」

晶はそう言うと、軽快な足取りで壁に向かって走りだした。

「うりゃっ」

掛け声と共にジャンプした晶は、三メートルはありそうな壁の上
に手をかけると、羽の生えたような動きで壁の上に立った。

「さすが兄さん。ついでに私も引き上げてくれるとうれしいのです
が」

秋彦は懐からロープを取り出して晶に向かって投げた。晶は受け
取ったロープを下にたらず。

「お前も少しは体を鍛えたらどうだ」

「私の担当ではありませんし、鍛えた所で兄さんや姉さんの身体能
力に追いつくのは無理です」

喋りながらたらされたロープを掴んだ秋彦。それを見た晶は、軽やかにロープを手繰り寄せる。見る見るうちに秋彦は壁の上までやって来た。

「さすがですね」

「ところでお前、今体重何キロだっけ？」

「75ですが」

「前より減ってるじゃないか。少しは鍛えて太れ」

壁の上で二人は校舎を眺めた。

朝の喧騒とは無縁の静けさに包まれた校舎。

災いは、まだ目を覚まさない。

第2話：侵入

つつがなく登校するはずだった学校の敷地に不法侵入してみた晶と秋彦。

校内の土を踏みしめた二人は、まず自分達より先に侵入した生徒の姿を探した。

「さっきの奴はどこだ？」

「あそこで手を上げているのがそうじゃないですか？」

秋彦が指差す先には、校舎の角のあたりで黒い覆面をして銃を構えた男の前で、両手を上げているさっきの制服が見えた。

「何だありゃ」

「絵に書いたようなホールドアップですね」

「とりあえず助けてみるか」

「頑張ってください」

手を振る秋彦を残して、晶は黒覆面の男の視界に入らないよう移動、すぐ後ろの木陰に滑り込んだ。

黒覆面と制服の声が聞こえてくる。

「何だ、お前は？」

「あー、その、えーと」

「……面倒だな。とりあえず死んどけ」

黒覆面が銃の引き鉄にかけた指に力を入れる。次の瞬間、黒覆面は晶の回し蹴りをわき腹に喰らい、くの字の格好で真横に飛んでいった。2メートルほど飛んだ黒覆面は地面で2、3回バウンド、おかしな格好で横たわったままぴくりとも動かない。

秋彦は黒覆面に近づいて脈を取った。

「まだ息がありますね。手加減したんですか？」

「当たり前だバカ。殺してどうする」

秋彦は黒覆面の手から拳銃を取った。

「まだ使えそうですね。もらっていいですか？」

「ふざけんなバカ。危ないもん拾うな」

その様子を見ていた制服は、適当な事を言っている二人に近づいてきた。

「あー、どうもありがとう」

晶と秋彦は制服の方に向き直る。制服の男は身長165cm位で、少し癖のある髪によく動く目が印象的だった。

「そうだお前だ。何やってんだ」

晶が制服の顔を見上げて指差した。

「何って、友達を助けに」

秋彦があごに手を当てて訊ねる。

「友達ですか」

「そう、友達」

「というと、人質になっているという生徒は」

「僕の友達」

「友人？ では今朝は一緒ではなかったのですか？」

「うん、今日は朝イチと一緒に学校に来てただけど、急にあの強盗団が入ってきてね。僕は逃げただけど矢野は、あいつ矢野っていうんだけど強盗団に”先生ー”とかいって走りよってって」

「……………」

「それであつという間に銃を突きつけられてた。もう大変だったよ」

晶が自分の額に指を当てる。

「……………その強盗団はスーツでも着てたのか」

「いや、なんか黒っぽい服で覆面してた」

「それを教師と間違えただど!？」

「かなりの剛の者ですね」

冷静に批評する秋彦。

「それでね、友達を見捨てたまま逃げちゃうのは何か嫌だから助けにきたんだけど」

「無茶だな」

晶がばっさりと切り捨てる。

「素晴らしい友情じゃないですか兄さん」

「考えて行動しろと言ってるんだ」

「ところで君達は何でここに？」

制服がたずねる。

「先に不法侵入している人を見て、負けてられるかと侵入、ですよ
ね兄さん」

「ああそつだよ、どうせ俺も考えてねーよ」

腕組みしてふてくされた晶が、ふと何かを思い出したように制服
の方を向いた。

「そついえばお前は誰なんだ」

「僕？ 僕はこの学校の新生で西村つていうんだ。よろしくね」

「私達もこの学校の新生生なんですよ。奇遇ですね」

「今日入学式なのに奇遇もあるか。生徒か新生しかないだろ
晶を無視して秋彦がしゃべり続ける。

「そつそつ、自己紹介が遅れました。私は佐々木秋彦と言います。

こちらのかわいいのは兄の佐々木晶です」

「かわいいと言っな」

二人を見ていた西村が両手を叩いた。

「そつだ、矢野を助けるの手伝ってくれない？」

「はあ？」

「いいですね。高校の思い出作りによさそつです」

「だから考えろつて言ってるだろ」

「矢野がつかまってるのはこつちだよ」

「いいか、状況をよくみて判断しろつて言ってるんだ」

「腕がなりますね兄さん」

「お前らはアレか、人の話聞けない病か」

こつして三人はこつそりと校舎に忍び込んでいった。

第3話：催眠

外の騒がしさとは対照的に静かな校内。

晶達はこれから通う予定の校舎の中に無断で足を踏み入れた。

「どうするんだ、これから」

晶が腕を組んで他の二人を見上げた。眼鏡の奥の瞳から精一杯の迫力をかもし出そうとしているが、それは二人に届かなかつた。

「そうですね、まずは捕まった人がどこにいるか調べましょう」

秋彦は形のいいあごに手をかけながらもっともらしい事を言う。

「やっぱり一人より三人だよな」

元気そうな西村。

晶は片方の眉を上げて西村の顔を見た。

「大体お前、一人でどうにかするつもりだったのか？」

「うん。矢野と付き合っていると、たまにこういう事があるから」

「はあ？」

不審げな顔をする晶。

「実はあいつ、ここの理事の息子でね、いわゆる坊ちゃんなんだ」

「それで誘拐などが頻繁に？」

あごに手を当てつつ秋彦が聞く。

「うーん、誘拐だけじゃなくて他にもいろいろとね。あいつ妙に運が悪いから」

「まあ、それはなんとなく納得できるな」

「たまたま朝一番に来たら強盗団ですからね」
うなづく二人。

「だからね、こういうの持ってるんだ」

そういつて西村は鞆から銀色の缶のような物を取り出した。

「何だこれ」

「催眠ガス入りのカートリッジ」

「はあ？ 何でそんなもの持ってるんだ」

「いや、いつもは催涙ガスなんだけどね、今日はたまたま」

「そうじゃなくて、どこで手に入れたんだ」

「僕の手製」

「手製？」

不審げな顔をする晶。

「というと、おまえが作ったのか」

「そうだよ」

あたりまえのようにいう西村。

「……効くのか？」

「うーん、こないだ近所の犬に試したんだけど、急に発情期になつてね、それで」

「絶対に使っな」

「えー？」

「それは催眠ガスじゃない」

「でも、犬はちゃんと寝たよ」

「発情したんじゃないのか？」

「その後飼い主に襲い掛かってね、ぶん殴られた後でちゃんと寝たよ」

「……いいかよく聞け、絶対に使っな。むしろ捨てる」

きつく言う晶。

「うーん、分かったよ」

残念そうに缶を鞆になおす西村。

晶が秋彦の方を見ると、携帯電話で何か話していた。

「何やってんだ秋彦」

「いえ、ちょっと知り合いに電話を」

携帯電話を耳に当てたまま答える秋彦。

西村が身をかがめて晶に訊ねる。

「晶、知り合いつて誰？」

「俺も知らん。つーかかがむな。そんなことせんでも聞こえるから」
秋彦が携帯電話をポケットにしまった。話は終わったようだ。

「兄さん、強盗団は校舎二階にいるらしいですよ」

「そうか、って誰から聞いたんだ？」

「知り合いです」

黙って聞いていた西村がしゃがんで晶に訊ねる。

「晶、知り合いつて誰？」

「だから俺も知らん。つーかしゃがむな。俺の背にけちつける気が憤慨する晶をよそに、秋彦が歩き出した。

「階段はこつちですよ」

そう言つて歩きながら校舎の端のほうを指差した。西村が感心したような声をあげる。

「よく知ってるね」

「これから三年間通うところですから、構造をよく把握しておくのは当然の事です」

「ふーん、そういうものなの」

「まずいな……」

二人の間を歩いていた晶がつぶやく。

「どうしました？ 兄さん」

「階段から誰か降りてくるぞ」

「何人ですか？」

「足音は二人だな」

西村が不思議そうな顔をする。

「足音？ 全然聞こえないけど」

「兄さんの耳は鋭いんですから」

「秋彦、どこか隠れる場所はあるか？」

振り向かずに聞く晶。

「ないですね」

あつさり言う秋彦。

「あれ、教室は？」

あたりを見まわす西村。

「全部鍵がかかっています」

ドアの取っ手に手をかけながら秋彦が呟く。

「という事は、先手必勝だな」

そう言っただけは階段に向かって駆け出した。

「じゃ、僕も」

そう言っただけで走り出す西村。

「危険だから待っていた方がいいですよ」

走り出す秋彦。

「何でおまえらまでついてくるんだ！」

「水臭いじゃない」

「一蓮托生です」

三人が走る先、階段の角から二人の男が出てくるのが見えた。

「ちっ」

舌打ちしつつ姿勢を低くして加速した晶の頭上を、銀色の缶が飛んでいった。

「……………！！」

即座に後ろに飛ぶ晶。

綺麗な放物線を描いて二人の男の足元に落下したそれは、勢いよ

く白い煙を噴きだした。

「な、何だこれは！」

「ごほっ、ごほっ」

むせる二人。

晶は後ろを振り向く。

「西村……あれ使っただけで言っただろっが！」

「いや、でもこういふときには催眠ガスが役に立つと思っただけど」

「催眠ガスでは？」

「あ、そうそう。ほらぐっすりだよ」

二人の方を見ると、やや前かがみになって股間をおさえていた。

「なっなん……………」

「えっあれっ……………」

混乱しているようだった。

「……どう見ても催眠でも催涙でもないんだが」

「しいて言えば催淫ですね」

「いや、これからぐっすりだよ」

力強く主張する西村。

混乱していた二人の男は、ふと顔を見合わせた。

しばらく見つめあった後、静かに二人の距離が縮まり始める……

「……秋彦、別の階段はどこだ」

「この校舎の逆の端です」

「そっちから行くぞ」

「え？ でもまだあの人たち寝てないよ。」

「いいから来い！ 急ぐぞ！」

急接近する二人を背に走り出す三人。

「急げー！！」

耳をふさいで走る晶。

背後では耳障りな音が新たな世界の誕生を高らかに告げていた。

第4話：崩壊

階段の踊り場で一息つく三人。

「おそろしい代物だな……」

まだ耳をふさぎながら晶がつぶやく。

「商品化したら面白そうですね」

あごに手を当てながら秋彦がつぶやく。

「あと二個あるけど？」

両手に持った西村が微笑む。

「捨てる！」

「まあまあ兄さん」

なだめる秋彦。

「それよりも兄さん、そろそろ二階です」

「そうだな」

耳から手を離れた晶は、膝について床に耳をつけた。西村が不思議そうに覗き込む。

「何してるの？」

「しっ」

秋彦が口到人差し指を当てる。

「兄さんはあやって、床に落ちた小銭を探しているのです」

「そうなんだ、大変なんだね」

「デタラメをいうなバカ。納得するなボケ。黙って集中させる」

しばらく後、床に突っ伏していた晶が立ち上がり、服のほこりを払った。

「大分先の方で三人分の足音がするな。多分そこだろう」

西村が感心したように晶の方を見た。

「すごいね、小銭からそういうことが分かるんだ」

「わかんねーよ。大体なんだよ小銭って」

「主に100円硬貨や1000円硬貨のような物を指します」

「お前ら俺を馬鹿にしてるだろ」

「とんでもない。私はともかく西村君に悪意はないでしょう」
晶が秋彦を睨む。

「じゃあお前には悪意があるのか」

「まあまあ、兄さん。お詫びに援護しますから」

そう言っただけで秋彦は懐から拳銃を取り出した。西村が少し驚いた表情で秋彦を見る。

「どうしたの、それ。本物？」

「ええ、あなたが向けられていた奴ですよ」

「使った事あるの？」

「もちろんです。こう見えてもゴルゴ13の生まれ変わりと言われる事が」

「まだ生きてるじゃねーか！！ 大体それ漫画だろ！」

我慢しきれなかった晶の声が校舎内に響く。

「しっ」

秋彦が口の人差し指を当てる。

「静かにしないと向こうに気付かれます」

「誰のせいだと思ってるんだ！」

「小銭？」

「お前は小銭から離れる！」

軽いコミュニケーションを済ませた三人は、階段から廊下を覗いた。

「兄さん、足音がしたのはどのあたりですか？」

「距離から考えて、ここから三つ目の教室だな」

三人は足音を忍ばせて廊下を歩く。目的の教室まで後少しの所で晶が振り返った。

「ちよつと様子を見てくる、ここで待ってる」

そういうと晶は教室のドアに近づき、身体を寄せた。

「大丈夫かな、晶」

「兄さんなら大丈夫でしょう」

「何で？」

「兄さんはこういう時のために改造手術を受けているのです。小銭に執着するのも費用が大変な事に関係がありまして」

「ふーん」

そこへ晶が戻ってきた。

「中には黒板の近くに一人、教室の後ろの方に二人。それと後ろの二人の足元に誰か倒れてたぞ」

「その寝ているのが人質でしょうか」

「まあ、俺たちとおなじ制服着てたしな。間違いないだろ」

西村が晶をじろじろと眺める。

「変身するの？」

「はあ？ 何が？」

「やっぱり小銭？」

「お前は何を言っているんだ」

秋彦が拳銃を握りなおした。

「それじゃ、私が黒板の方を担当します。兄さんは後ろの二人をお願いします」

「ん、ああ分かった」

「僕は？」

「ここで待ってる」

二人が教室の後ろのドアに張り付く。

「それじゃ、1、2の3で行くぞ」

「分かりました」

晶が教室のドアに手をかける。

「1、2の……さんっ!!」

ドアが開くと同時に、晶は目にもとまらぬ速さで窓際の二人に突進した。

一人は腹部に一発食らって宙を舞い、もう一人は首に飛び蹴りを決められて壁まで吹き飛ぶ。最後の一人は、こめかみに飛んできた銃のグリップが命中してゆっくりと倒れた。

「まあ、こんなもんか」

「そうですね」

「あれ、もう終わったの？」

「そういつつ西村が入ってきた。」

「ああ。そうだ西村、こいつが矢野か？」

「そう言っただ倒れている人を指差す晶。」

「あ、うんそうだよ」

「西村は倒れている矢野に近寄り肩をゆすった。」

「ほらほら、おきておきて」

「うーん……あ、おはよう西村君、今日は入学式だね」

「目をこすりながら体を起こし、伸びをする矢野。」

「入学式、今日はもうないみたいだよ」

「えっ、何で？」

「……何だこの大ボケ小ボケは」

「二人の様子を見ていた晶が呟いた。」

「それよりも早く逃げませんか。この校舎には爆弾が仕掛けられて

いるそうですし」

「周囲を見ながら秋彦が言う。」

「そうだな……おいおまえら、逃げるぞ」

「そうだね。行くよ矢野」

「廊下に向かって歩き出す四人。そのとき矢野は、床に落ちていた

リモコンのようなものを見つけた。」

「あれ？ テレビのリモコン？」

「床から拾い上げて手にとる矢野。周りをきよきよと見回して、

黒板の横にテレビを発見。」

「えい」

「リモコンのボタンを押した。」

「上の階で突然爆発音が響き、振動が晶たちをよろめかせた。」

「なんだ!？」

「突然の大音響に驚く晶。」

「爆弾の爆発ですね」

あわてない秋彦。

「何でいきなり……」

「テレビが見つからないけど、これ壊れてるのかな？」

リモコンを押しまくる矢野。あちこちで炸裂する爆弾。揺れまくる校舎。

「ななな、なんだー!？」

叫ぶ晶。

矢野は西村を呼び止めてリモコンを見せてみた。

「西村君、このリモコン壊れてない？」

「これ？ ちょっとわかんないなあ。秋彦、これ見てくれる？」

西村は矢野から受け取ったリモコンを秋彦に渡した。

「ん？ これはテレビのリモコンではないようですね」

リモコンを見ながら秋彦が言う。西村は不思議そうに聞き返した。

「そうなんだ。それじゃこれ何だろう？」

「おそらく爆弾の起爆装置でしょう」

「ふーん。それじゃテレビが付くわけないよ。ばかだなあ、矢野は」

「えへへ」

「えへへじゃねえだろ大馬鹿野郎ー!!」

叫ぶ晶。

「さつきから何してんのかと思ったら……」

頭をかきむしる晶。そこへさらに爆発音が響き、天井から瓦礫が降ってきた。

「秋彦！ 爆発を止める！」

「無理です」

あっさりと言う秋彦。

「ともかく、早くここから逃げるべきですが……この強盗の方々はどうしますか？」

秋彦が指差す方を見ると、三人の強盗はまだ床に倒れていた。

「……見捨てるわけにも行かないしなあ。俺が二人抱えるから、も

「う一人は秋彦頼む」

「分かりました」

晶は二人、秋彦は一人を肩に担ぐ。晶はリモコンを眺めている西村と矢野に声をかけた。

「おい、おまえらさっさと逃げるぞ」

「え？ 何で？」

真面目に聞き返す矢野。ちょっと固まる晶。

「……西村」

「何？」

「矢野はおまえが責任を持ってつれて来い。いいな」

「うん、わかった」

西村は力強くうなずいた。

「それじゃ行くぞ！」

晶を先頭に駆け出す四人。爆発とともにゆれる校舎。瓦礫が落ち、壁が崩れる中を走り抜ける。

階段に差し掛かるところで晶が振り向いた。

「全員いるか！」

「矢野がトイレに行ったけど」

「何だどー！！」

叫ぶ晶。

「アホかあいつは！ 西村！ おまえちゃんとつれてこいよ！」

「いや、でも急にトイレ行くなって駆け出していった……」

「くそ！ 秋彦！ トイレはどこだ！」

「あそこです」

そう言っって秋彦が指差した先が、轟音とともに吹き飛んだ。

「……………」

「……………」

「どうすんだよ……………」

呆然と晶。

「うーん。多分大丈夫だと思うよ」

普通に西村。

「はあ？」

「いや、説明は後ですから、早くここから出た方がよくない？」

「そうですね。このままだと校舎の中に生き埋めです」

落ちてくる瓦礫がだんだん大きくなっていった。

「……意味はわからんが仕方ない、行くぞ」

再び駆け出す三人。階段を駆け下りて1階へ。もう少しで出口という所で廊下が瓦礫の山で埋まり通れなくなっていた。

「うわー。どうしよう？」

瓦礫を見上げる西村。

「こうするー！！」

大人二人を抱えたまま回し蹴りで廊下の横の壁を破壊する晶。

「それでは出来るだけ校舎から離れましょう」

出来た穴からさっさと出る秋彦。校舎から出て走りつづける三人。裏庭のあたりでようやく一息ついた。

「校舎が……」

晶がつぶやく。

晶たちが今日から通うはずの場所は、見る見るうちに崩れていき瓦礫の山になっていった。

「うわー。どうするんだろ」

西村がつぶやく。

「これは……矢野君はちょっと絶望的ですね」

肩にかついだ強盗を地面におろしながら秋彦が言う。

「そつとも限らないよ」

妙に自信ありげに言う西村。

「……そういえば、さっきもそんな事言ってたな」

肩にかついだ強盗を放り投げながら晶が言う。

「あいつはどんな危険な時も、命にかかわる怪我をしたことないんだ」

「と……」

「この間誘拐された時も、乗ってた車がダンプと正面衝突してね」
「……ほう」

「車はめちゃくちや、犯人二人は即死、僕は全治一ヶ月だったけど、あいつはかすり傷だけ」

「……それはまたものすごい悪運の強さだな」

「そうそう、だからさ”何してんのー”とか言いながら出てくるんじゃないかな」

「何してんのー」

その声に全員が振り向くと、そこには傷一つ無い矢野がいた。驚いた晶が尋ねる。

「おまえ……どこに居たんだ」

「え？ 体育館のトイレだけど」

「そういえば、途中に体育館への渡り廊下があったような」
特に動じてない秋彦。

「なんか心配して損した気分だ」

ぼやく晶。そのとき矢野が何か持っていることに気付いた。

「何持ってるんだ？」

「ああこれ？ トイレで見つけたんだ」

そう言っただけに渡す矢野。秋彦と西村も何事かと近づいてきた。

「筒と時計？ 何だこりゃ」

「時限式の爆弾ですね」

さらりと言っ秋彦。

「時限式……爆弾……？」

くり返す晶。

「え？ 時計じゃないの？ いろいろ押しても何も鳴らないから変だと思っただ」

「いろいろ……押した……？」

くり返す晶。秋彦が晶の手の中のそれを覗き込む。

「残り15秒といったところですか」

「15秒……どうするよ、おい……」

「それはもちろん、兄さんの強肩に期待します」

「……投げるってか」

「ここに置いて走って逃げるよりは安全かと」

爆弾を見てため息をつく晶。それをちらりと見たあと、晶が手に力をこめる。

「うおりゃああああ！」

全力で晶の手から離れた爆弾は、あっという間に離れて小さくなっ
っていった。

「伏せるー！！」

次の瞬間、空で爆発が起こり、大音響と閃光があたりと包む。地面に横たわった晶達を爆風と衝撃が襲うが、十分な距離があったおかげでたいした事は無かった。

「さすがですね、兄さん」

「はー……やれやれだ」

晶はうつ伏せから仰向けになって寝転んだ。起き上がった矢野がまわりを見わたす。

「警察の制服着た人がいっぱいこっちに向かってきてるけど、何？」

晶がうんざりした顔で言う。

「面倒くさいことになりそうだな」

たくさんの警察官、多くのマスクミ、崩壊した校舎。

ちょっとした災難に、晶は空を見上げてため息をついた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197b/>

ちょっとした災難

2009年5月16日18時01分発行